

## I. 行動分析による訓練システムの考え方

技能の習得は、必要な知識をも含めて自から学びとるものである。そのためには、精選された学習内容について効果的な教材・教具を用いて、適時に適確なフィードバックを得ながらマイペースの学習が出来るような学習の場を構成する必要がある。

学習内容の精選は従来でもその必要性が強調され、カリキュラムに反映されているが、その多くは学的体系と称されるスコープの中で実技と学科が決められ、殊に学科については将来の伸びに期待して広汎な知識要求が多い。技能の習得を目標とする場合に果してこれでよいのか再吟味する必要がある。

行動分析による学習システム作りには3つの特色がある。

第1点は、熟練技能者の行動（作業遂行上のテクニックと頭の中の神経の働かせ方）を分析することによって、学習目標を明確にとらえ、これに適した実学融合カリキュラムを編成することである。

熟練技能者は技倆と知識とを完成させており、そのプロセスは技能を学ぼうとする者の目標である。

第2点は、作業順序と学習順序とは必ずしも一致しないことを前提としてカリキュラムを組むことである。

熟練技能者は、作業の初めに若しくは途中で既に出来上り状態を予測し、どんなミスが失敗につながるかなどを熟知して行動している。つまり正しい行動をとるための判断基準が仕上がっており、且つ技倆は経験的に定着している。一方、初めて技能を学ぶ者にとっては、判断の目安はもとより学習行動をおこすに必要なレディネスも欠けている。従って、極めて単純な手順のみの作業は別として、作業手順に含まれる要素についてレディネスに応じた学習が必要となる。

第3点は、教材のシステム化を図ることによって自学自習も可能にすることである。

教材は、学習者の学習進行を掌どる指示を軸に、学習シーケンスに従い

適時適所にA V教材を位置づける。

従来のA V教材は、ともすればその役割と位置づけがあいまいになり副教材的な存在になりがちであった。

学習の過程で学習者のレディネスを一步一步高め拡げていくために、熟練技能者の判断基準や着眼点のモデル化、行動の仕方のポイントの映像化シミュレート化、裏づけとなる知識の映像化や実験などの工夫によって、A V教材のあり方そのものが見直され、それらの有機的な結合を図ることによって学習者の積極的な学習活動を促進する学習の場作りが可能となる。